

指示があるまで、このページをよく読んで待ちなさい。指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。

I 受験に際しての注意

- 1 問題用紙は一ページ（表紙を除く）から十三ページまでである。
- 2 問題の内容についての質問には、いつさい応じない。それ以外のことがらについて尋ねたことがあれば、手をあげて監督者に聞くこと。
- 3 監督者の「はじめ」の合図で始め、「やめ」の合図ですぐやめること。
- 4 解答用紙が折れ曲がったり、破れたり、汚れたりした場合には、手をあげて監督者に申し出ること。

II 解答記入上の注意

- 1 すべてマーク方式で解答を記入すること。
- 2 マークは必ずHBの黒鉛筆を使用して記入すること。ボールペン、万年筆、サインペン等を用いてはいけない。
- 3 答えは、すべて各問題の指示にしたがって解答欄にマークすること。
- 4 一度マークしたものを訂正するときは、プラスチック消しゴムで完全に消してからマークしなおすこと。消して出たカスはきれいに払っておくこと。
- 5 次の場合は、いずれも誤答となるから特に注意すること。
 - (1) マークの仕方が悪かった場合。（特にマーク欄が塗りつぶされていなかったり、外側に少しでもはみ出した場合）
 - (2) 問題が要求している以上に余分な答えをマークした場合。
 - (3) マークすべきところ以外に印をつけたり、汚したりした場合。特に枠内は絶対に汚さないこと。
 - (4) 訂正の場合の消し方が不十分な場合。

III 氏名等の記入上の注意

- 1 問題用紙と解答用紙の両方の所定欄に、漢字で氏名を、算用数字で受験番号をそれぞれ記入すること。
- 2 解答用紙の左側にある受験番号をマークすること。

氏 名	
-----	--

受験番号					
------	--	--	--	--	--

一 次の各問いに答えなさい。

問一 「きせいひんは体に合わない」の傍線部の漢字と同じ使い方をするものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 交通きせいに遇って遅れた。
- ② 五年ぶりにきせいした。
- ③ きせいの英雄は君だ。
- ④ 君はきせいの法律に従うべきだ。

問二 敬語の使い方として正しいものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 日大太郎様でいらつしやいますか。
- ② 事務所の受付でうかがって下さい。
- ③ ご自分でお持ちいたしますか。
- ④ 誠先生が学校をご紹介しますくださいます。

問三 A「呵責」 B「伝播」の読みを次より選び、番号をマークしなさい。

- | | | |
|---|--------|--------|
| A | ① あせき | ② あしやく |
| | ③ かしゃく | ④ かせき |
- | | | |
|---|--------|--------|
| B | ① でんばん | ② でんぱん |
| | ③ でんぱ | ④ でつぱん |

問四 ほぼ同じ意味とはならない組み合わせを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 歯が浮く—歯が立たない
- ② 腕が鳴る—腕をさする
- ③ 目に角を立てる—目を三角にする
- ④ 手に余る—手に負えない

問五 ☐ に動物名の入らないものを次より選び、番号をマークしなさい。

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| ① 花 ☐ 風月 | ② 君子 ☐ 変 |
| ③ ☐ 鳴狗盗 | ④ 疑心暗 ☐ |

問六 「先人のいぎよう」の傍線部を漢字にした時の総画数を次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 九画
- ② 十画
- ③ 十一画
- ④ 十二画

問七 傍線部の熟語が間違っているものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 亡くなった人への愛惜の念だ。
- ② 車のエンジンの異状を見つける。
- ③ 彼の華々しい最期を見た。
- ④ 衆知を集めて国を治める。

問八 「人生の幸・不幸の定まらないこと」という意味の故事成語を次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 五里霧中
- ② 塞翁が馬
- ③ 他山の石
- ④ 杞憂

問九 傍線部の単語の使い方が適切でないものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 風雨が激しくなった。しかし休校にはならなかった。
- ② 私は高校生だ。だから勉強をするのだ。
- ③ 私は必ず入学します。そして野球部に入ります。
- ④ 私には実力があります。なので一番になります。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

芸術もジャンルによってコピーの許容性ともいべきものは一樣ではない。① 絵画や彫刻では原作品が唯一で絶対である（版画のように同一のものが複数オリジナルという場合もないわけではないが）。模造や複製はどれほどよくできていても原作とは比べものにならないし、いわんや、原作よりすぐれた複製などというものは考えることすら困難であろう。

② これとタイシヨウ的なのが音楽で、演奏を一種のコピーであると考えれば、音楽はコピーによってはじめて表現になると言ってもよい。コピーをつくる演奏家がすぐれていれば、芸術的栄誉が与えられるのも自然のこととされる。ミロのヴィーナスの複製をこしらえるのが上手だからといってその人が彫刻家として名を知られることはないが、ベートーヴェンの交響曲を指揮してすばらしい演奏を行うことができる指揮者はりっぱな音楽家である。

絵画・彫刻の模造は寸分違わぬように原作を再現することを目標とする。複製者の解釈などが介入することは **A** から否定される。ところが、音楽の演奏に当っては、つねに演奏者の解釈が期待されている。作曲家も、もとは、演奏者に自由な活動を許すように特別な配慮をしたものである。カデンツァはその一例である。音楽はコピーに積極的な意義、創造性を認めていることになる。造形芸術と異なる点だ。

文学は、造形芸術と音楽の中間に立っている。印刷のおかげで、多くの文学作品は原本と複製の差別を意識しなくてもよくなっている。**B**、一般の読者は自分の読んでいるテキストが、③ 原本であるかコピーであるかを気にしていない。本はすべてコピーであるが、いちばん元は原稿だからそれを読まなくては本当の味いはわからない——そんなことを考える読者はまずないであろう。

同じ作品についても、よい版と、そうでない版があることは知っている。これはいい本だ、これは製本も印刷もお粗末である、というようなことを言う。初版よりもすぐれた版の出ることもある。これらの点で文学は、いくらかではあるが音楽に通じるところをもっている（ちなみに、小説をコピーして読もうという人はさすがにない、のはおもしろい。文学は最近の複写機によるコピーを許容しないのか）。

そういう一般読者の素朴さとは別に、文学においても、絵画や彫刻と同じように原形、原本のみ価値があると考ええる人たちの存在も無視することはできない。ことに、文学を源泉主義に立って考えようとする文献学の専門家にこの考え方は顕著である。同じ作品にいくつもの異なったテキストがあるとき、どれがいちばんもとの形、原稿に近いことによって、その **C** を決定しようとする。そこで、テキストの校合が④ 始まる。校合、校訂を組織的にくりかえして、原稿のはっきりしない作品であれば、無限に原稿に近づこうとする遡源活

動がなされるのである。

こういう文献学の仕事^④が古くからあったのではなく、比較的近世になってから興ったものであることは心に留めておいた方がよからう。もともと文学は音楽に近いコピーの考え方をしていたのだが、書物の激増にともなうて原形確立の必要が生じ、コピーを否定する造形芸術的性格を新たにそなえるようになったのである。これは印刷の普及と無関係ではない。音楽、絵画、彫刻のどれをとってみても、複製の技術は文字の印刷に比べてはるかに遅れている。文字のコピーをつくる印刷はもとの手書きの文字よりも読みやすい複製をつくることができる。そこから活字信仰も生れる。手書きの文章なら信用しないことも印刷してあると何となく本当のような気がするという人がすくなくない。原形よりすぐれたコピーの存在を裏付けるものである。

印刷によって文学はコピーに関して微妙な立場におかれることになった。一方ではコピーを許容し、なおかつ他方においてはコピーを淘汰、否定しなくてはならない。文学研究の複雑さもここに起因する。

注意しなければならないのは、本というコピーができるようになって、それまでの、たとえば、写本という形でつくられたコピーとはまったく違った機械的複製があらわれたことである。D、音楽の演奏がコピーであるという意味ではコピーにならない。何でも複写機でコピーするようになって読まれないものが多くなったのと同じく、本という機械的コピーが多くなるにつれて、人間の理解をともなったコピーが少なくなってきたのは皮肉である。

*

文学作品はものであるか、現象であるかという問題がある。本はたしかにものであるが、読まれない本は本ではない。読まれて理解されるのはすでに現象であって、物体とは関係がない。そういう理解をともなわずにつくられるコピーは、しばしば原形を墮落させて、悪いコピーになる。

それに対して、作品についての新しい解釈がおのずから新しいコピーをつくり上げるといふとき、それはしばしば、原形、あるいは、もとのコピーよりすぐれたものになりうる。

われわれは、いかにも無造作に、ものを読む、というが、本当に読む意味を考えることは稀である。読むというの、目に見えないコ

ピーを頭の中につくり上げることにはかならない。そして人間はだれひとりとして、まったく同じ反応をするものはないから、同じ作品についてまったく同じ理解をすることは考えられない。似ているようでも、こまかいところを見れば必ず違っている。完全に同じコピーはないということである。

もし十人が十人、すこしも違う理解をし、同じコピーをつくり上げたとするなら、その人たちは人間ではない。カメラか何かと同じである。人間なら、めいめいの個性、たとえ個性というに値いしないような個人差であっても、それによってユニークなヴァリエーションをつくらずにはおかないであろう。

したがって、作品は読まれ、理解されて、読者の頭の中に宿るヴァリエーションとしてのコピーに拡散するほかはない。実在ではなくて、あくまで現象である。同一作品は読まれて唯一絶対の形を保持することは不可能である。理解されるたびに新しいコピーをつくらずにはいない。そのコピーがすぐれていることもあるし、そうでないこともある。ただ、コピーというものを否定しては芸術的な言語表現の理解は成立しないということだ。造形芸術のように形式的複製を拒否するジャンルにおいても、鑑賞、理解は必ず目に見えないコピーを発生させているはずである。

事実とか原形とかを尊重する精神が有形、無形のコピーに対して否定的な姿勢をとるのは自然なことであろうが、それによって、理解ということ自体があいまいにされていることも見過すことはできない。

解釈は無意識で、多くの場合、無形のコピーである。すぐれた作品とは、いつまでも原形を崩さずに保つ表現のことではなくて、活潑かつぱつに新しく興味あるコピーを生み出す力をもったものである。

収斂しゅうれんする方向にあるなら、その原形はすぐれたものであると言ってよい。原形のみによって価値が決定するのではない。コピーによっても原形の価値は定まる。

E

の解釈があつて、それらが、たとえどんなにバラバラであつても、

問一^① コピーの許容性の説明として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 原作よりすぐれたコピーを作ることが許されるかどうかということ。
- ② どのくらいの容量までコピーをしても大丈夫なのかということ。
- ③ コピーしたものに芸術性を認めているかどうかということ。
- ④ 寸分違わぬようにコピーされているかどうかということ。

問二^② タイショウ的の正しい漢字を次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 大賞的
- ② 対象的
- ③ 対称的
- ④ 対照的

問三^③ A に当てはまる語を次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 頭
- ② 鼻
- ③ 肩
- ④ 腹

問四^④ B に当てはまる語を次より選び、番号をマークしなさい。

- ① あるいは
- ② 少なくとも
- ③ しかし
- ④ なおかつ

問五^③ 原本であるかコピーであるかを気にしていないの理由として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 本の場合は原本でもコピーでも内容に変わりはなく味わいも同じだから。
- ② 本の場合も原本が一番良いものに決まっているから。
- ③ 本の場合はよい版とそうでない版があり、誰にでもすぐにわかるから。
- ④ 本の場合はコピーして読もうなどと考える人はほとんどいないから。

問六^④ C に当てはまる語を次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 新旧
- ② 大小
- ③ 優劣
- ④ 真偽

問七^④ 音楽に近いコピーの考え方の説明として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① コピーを否定する造形芸術的性格をそなえる考え方。
- ② コピーの技術は遅れてしまっているが、コピーされる前の原形を一番大切だとする考え方。
- ③ コピーをすることによって、より優れた芸術作品に変化していくのだという考え方。
- ④ コピーに積極的な意義を与え、コピーした人の解釈が付け加えられていて良いとする考え方。

問八

D に入る文として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 写本もコピーも大きな違いがないとすれば
- ② 原本が完璧に複製されている作品ならば
- ③ 本はコピーであっても読まれなければ
- ④ 音楽が独自の解釈を加えて演奏できなければ

問九

⑤ 理解されるたびに新しいコピーをつくらずにはいないの説明として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 全員が少しも変わらない理解をし、同じコピーを作ること
- ② 一つの作品について、新しい理解がされるたびに、少しずつ原稿を手直しすることで、より良い作品が作られていくということ。
- ③ どんなに複製の技術が進んでも完全に同じ作品を作ることは不可能なので、ひとつの作品についていくつかのコピーが存在してしまうということ。
- ④ 原本は一つでも、読む人によって反応や理解は様々であり、そのたびに少しずつ理解の異なる作品がそれぞれの人の頭の中に作られるということ。

問十

E に当てはまる四字熟語として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 七転八倒
- ② 二束三文
- ③ 一期一会
- ④ 十人十色

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(これまでの内容)

私(一匹の猿)は海を渡り、ある島にたどり着いた。霧が立ち込めており、島の様子がわからないため、島を歩き回っていくうちに、一匹の猿と出会う。ふるさとが同じであるということから二匹の猿は親しくなっていた。

霧はまったく晴れ渡って、私たちのすぐ目のまえに、異様な風景が現出したのである。青葉。それがまず私の眼にしみた。私には、いまの季節がはつきり判った。ふるさとでは、椎の若葉が美しい頃なのだ。私は首をふりふりこの並木の青葉を眺めた。しかし、そういう陶酔も瞬時に破れた。私はふたたび驚愕の眼を見はったのである。青葉の下には、水を打った砂利道が涼しげに敷かれていて、白いよそおいをした瞳の青い人間たちが、流れるようにぞろぞろ歩いている。まばゆい鳥の羽を頭につけた女もいた。蛇の皮のふとい杖をゆるやかに振って右左に微笑を送る男もいた。

彼は私のわななく胴体をつよく抱き、口早に囁いた。

「おどろくなよ。毎日こうなのだ。」

「どうなるのだ。みんなおれたちを狙っている。」山で捕われ、この島につくまでの私のむざんな経歴が思い出され、私は下唇を噛みしめた。

「見せ物だよ。おれたちの見せ物だよ。だまっている。面白いこともあるよ。」

彼はせわしげにそう教えて、片手ではなお私のからだを抱きかかえ、もう一方の手であちこちの人間を指さしつつ、ひそひそ物語って聞かせたのである。あれは人妻と言って、亭主のおもちゃになるか、亭主の支配者になるか、ふたとおりの生きかたしか知らぬ女で、もしかしたら人間の臍(へそ)というものが、あんな形であるかも知れぬ。あれは学者と言って、死んだ天才にめいわくな注釈をつけ、生れる天才をたしなめながらめしを食っているおかしな奴だが、おれはあれを見るたびに、なんとも知れず眠たくなるのだ。あれは女優と言って、舞台にいるときよりも素面であるときのほうが芝居の上手な婆で、おとお、またおれの奥の虫菌がいたんで来た。あれは地主と言って、自分もまた労働しているとしじゅう弁明ばかりしている小胆者だが、おれはあのお姿を見ると、鼻筋づたいに虱(しゅみ)が這って歩いているようなもどかしさを覚える。また、あそこのベンチに腰かけている白手袋の男は、おれのいちばんいやな奴で、見ろ、あいつがここへ現われたら、もはや中天に、臭く黄色い糞の竜巻が現われているじゃないか。

私は彼の饒舌(じょうぜつ)をうつつに聞いていた。私は別なものを見つめていたのである。燃えるような四つの眼を。青く澄んだ人間の子供の眼を、先刻よりこの二人の子供は、島の外廓(がいかく)に築かれた胡麻石の塀(へい)からやと顔だけを覗きこませ、むさぼるように島を眺めまわしているのだ。二人ながら男の子であろう。短い金髪が、朝風にばさばさ踊っている。ひとりには、そばかすで鼻がまっくらである。もうひとりの子は、桃の花のような頬をしている。

やがて二人は、同時に首をかしげて思案した。それから鼻のくろい子供が唇をむつと尖らせ、烈しい口調で相手に何か耳うちした。私は彼のからだを両手でゆすぶって叫んだ。

「何を言っているのだ。教えてくれ。あの子供たちは何を言っているのだ。」

彼はぎよつとしたらしく、ふつとおしゃべりを止し、私の顔と向うの子供たちとを見比べた。そうして、口をもぐもぐ動かしつつ暫く思いに沈んだのだ。私は彼のそういう困却にただならぬ気配を見てとったのである。子供たちが訳のわからぬ言葉をするとく島へ吐きつけて、そろって石堀の上から影を消してしまつてからも、彼は額に片手をあてたり尻を掻きむしったりしながら、ひどく躊躇^④をしていたが、やがて、口角に意地わるげな笑いをさえ含めてのろのろと言いだした。

「いつ来て見ても変らない、とほざいたのだよ。」

変らない。私には一切がわかった。私の疑惑が、まんまと的中していたのだ。変らない。これは批評の言葉である。見せ物は私たちなのだ。

「そうか。すると、君は嘘をついていたのだね。」ふち殺そうと思った。

彼は私のからだに巻きつけていた片手へぎゅつと力こめて答えた。

「ふびんだつたから。」

私は彼の幅のひろい胸にむしゃぶりついたのである。彼のいやらしい親切に対する憤怒よりも、おのれの無智に対する羞恥の念がたまらなかつた。

「泣くのはやめろよ。どうにもならぬ。」彼は私の背をかるくたたきながら、ものうげに呟いた。^⑤「あの石堀の上に細長い木の札が立てられていてるだろう？ おれたちには裏の薄汚く赤ちやけた木目だけを見せているが、あのおもてには、なんと書かれてあるか。人間たちはそれを読むのだよ。耳の光るのが日本の猿だ、と書かれてあるのさ。いや、もしかしたら、もっとひどい侮辱が書かれてあるのかも知れないよ。」

私は聞きたくもなかつた。彼の腕からのがれ、枯木のもとへ飛んで行つた。のぼつた。梢にしがみつ、島の全貌を見渡したのである。日はすでに高く上つて、島のここかしこから白い霧がほやほやと立っていた。百匹もの猿は、青空の下でのどかに日向ぼっこして遊んでいた。私は、滝口の傍でじつとうずくまっている彼に声をかけた。

「みんな知らないのか。」

彼は私の顔を見ずに下から答えてよこした。

「知るものか。知っているのは、おそらく、おれと君とだけだよ。」

「なぜ逃げないのだ。」

「君は逃げるつもりか。」

「逃げる。」

青葉。砂利道。人の流れ。

「こわくないか。」

私はぐっと眼をつぶった。言っていけない言葉を彼は言ったのだ。

はたはたと耳をかすめて通る風の音にまじって、低い歌声が響いて来た。彼が歌っているのであろうか。眼が熱い。さつき私を木から落としたのは、この歌だ。私は眼をつぶったまま耳傾けたのである。

「よせ、よせ。降りて来いよ。ここはいいところだよ。日が当るし、木があるし、水の音が聞えるし、それにだいいち、めしの心配がいらないのだよ。」

彼のそう呼ぶ声を遠くからのように聞いた。それからひくい笑い声も。

ああ。この誘惑は真実に似ている。あるいは真実かも知れぬ。私は心のなかで大きくよろめくものを覚えたのである。けれども、けれども血は、山で育った私の馬鹿な血は、やはり執拗(しつとつ)に叫ぶのだ。

——否！

一八九六年、六月のなかば、ロンドン博物館付属動物園の事務所に、日本猿の通走(とんそう)が報じられた。行方が知れぬのである。

A、

(『猿ヶ島』 太宰治)

問一

① いまの季節がはつきり判ったとあるが、ここで言っている季節として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 盛夏 ② 初夏 ③ 早春 ④ 晩春

問二

② 私のわななく胴体を強く抱きとあるが、この動作に表れている「彼」の心情として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① この場から逃げ出そうとする私を引き留めようとした。
② 今にも飛び出していこうとする私を引き留めようとした。
③ 私の存在を周囲に知らせないよう私を隠そうとした。
④ 激しく動揺し、取り乱した私を落ち着かせようとした。

問三 ^③ もぐもぐの表現技法を示したものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 倒置法 ② 擬人法 ③ 擬態語 ④ 暗喩

問四 ^④ 躊躇の意味として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① はじらうこと
② ためらうこと
③ こまりはてること
④ しつこいこと

問五 ^⑤ ものうげにとはどのような様子を表したのか、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 気分がふさいだ様子
② 面倒くさそうな様子
③ 追い詰められた様子
④ 後悔している様子

問六 ^⑥ この誘惑とは何か、説明したものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 生活の不安が全くないこと。
② 精神の安定を保つことができること。
③ 仲間とともに暮らせること。
④ いつでも太陽の光を浴びられること。

問七 ^⑦ 否とは何を表したのか、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 仲間の無償の優しさに対する反発
② 集団に埋もれてはいけないという判断
③ 自ら真実を求めていこうという決意
④ 周囲の欲する物に対する再発見

問八 空欄 A に入れるのに最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① なぜなら
② しかも
③ たとえば
④ つまり

問九 この本文の作者太宰治の作品として当てはまらないものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 人間失格
② 富嶽百景
③ 津軽
④ 雪国

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

近ごろ、最勝光院に、梅盛りなる春、^①ゆゑづきたる女房一人、釣殿せうでんのわたりにたたずみて、花を見るほどに、男法師などうちむれて入り来たりければ、こちなしと思ひけん、^②帰り出でけるが、着たる薄衣のことのほかに黄ばみすけたるを笑ひて、

花を見すてて帰る猿③まろ

と、連歌をしかけたりければ、とりあへず、

里守る犬のほゆるにおどろきて

と、つけたりけり。ひとびとはちて逃げにけり。この女房は俊成卿女しゅんぜいきょうのむすめとて、^④いみじき歌よみなりけるが、ふかく姿をやつしたりけるとぞ。

〔十訓抄〕

問一 ゆゑづきたる女房 いみじき歌よみの現代語訳として最も適切なものをそれぞれ次より選び、番号をマークしなさい。

① ゆゑづきたる女房

① 訳のありそうな妻

② 由緒ありそうな女性

③ 気品のなさそうな女性

④ なにかにとりつかれたような妻

④ いみじき歌よみ

① 立派な歌人

② 長続きしている歌人

③ 恐ろしい歌人

④ とてもひどい歌人

問二 けんの品詞名を次より選び、番号をマークしなさい。

① 形容詞

② 動詞

③ 助動詞

④ 副詞

問三 猿まろがたとえているものを次より選び、番号をマークしなさい。

① 男法師

② 十訓抄の作者

③ 里守る犬

④ 俊成卿女

問四 本文の主題として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

① 大勢で一人の弱い者をいじめてはいけない。

② 和歌の上達法は周囲に気を配ることが肝要である。

③ 本当の達人は常に謙虚でなくてはならない。

④ 人を服装やみかけで判断してはいけない。

問五 「十訓抄」と同じ説話文学の作品を次より選び、番号をマークしなさい。

① 竹取物語

② 今昔物語集

③ 古事記

④ 古今和歌集